

名古屋 文化情報

2016
9・10
September / October

No. 370
NAGOYA
Cultural
Information

随想／碓氷 悠太（松岡伶子バレエ団プリンシパル） 視点／名古屋と江戸川乱歩
この人と／赤堀 加鶴繪（日本舞踊赤堀流三代家元）
いとしのサブカル／高橋 爾（LIVE HOUSE GSP STUDIO）



2016

9・10

September / October

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 振り返って思う事
碓氷 悠太(松岡伶子バレエ団プリンシパル)…………… 3

視点 名古屋と江戸川乱歩…………… 4

この人と…
赤堀 加鶴繪(日本舞踊赤堀流三代家元)…………… 6

ピックアップ 名演小劇場こだわりの新企画
人気集める毎月の「ゲキ×シネTIME」…………… 10

いとしのサブカル
高橋 爾(LIVE HOUSE GSP STUDIO)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (相山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品
浪裡白跳張順
(2014年)

最近の勉強のひとつとして作っている、平面を立体にした
(歌川国芳が描いた「浪裡白跳張順」)作品です。



写真：二塚一徹

葉栗 剛 (はぐり たけし)

- 1957年 名古屋市に生まれる
- 2015年 Art Santa Fe(アメリカ)
- 2016年 Art Stage Singapore(シンガポール)
Art Busan(韓国)

「2015年 名古屋市民文芸祭」
(第六回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
川柳の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆ 東海市立明倫小学校3年

多川 晴稀
ビー玉の中は魔法の世界だよ

◆市会議長賞◆ 名古屋市立有松中学校2年

小谷 さくら
あと一歩僕の頑張り無駄じゃない

◆市教育委員会賞◆ 東海市立平洲小学校3年

蟹江 心陽
夕日見ててん校した子思い出す

◆市文化振興事業団賞◆ 東海市立加木屋南小学校5年

毛利 友哉
あいさつはみんなの心つないでる

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆ 東海市立横須賀小学校2年

荒木 葉奈
ほんのなかいつてみたいなぼうけんだ

◆中日賞◆ 一宮市立北方中学校3年

安達 桃伽
千枚田に千個の月が美しい

随想

振り返って思う事



うすい ゆう た
碓氷 悠太(松岡伶子バレエ団プリンシパル)

9歳からバレエを始め、平成15年より松岡伶子バレエ団に所属。多くの舞台で主役をつとめる。
 平成27年度 名古屋市芸術奨励賞を受賞。
 11月27日(日)松岡伶子バレエ団公演「シンデレラ」の王子役で出演予定。

最近はバレエ人口も増えて、男の子がバレエを習うのもめずらしい事ではなくなった。

自分と同年代の優秀なダンサーは沢山いますが、みんな習い始めた頃はスタジオで大勢の女の子の中にポツンと男の子という図が普通だった。小学校3年生の頃、体が弱かった僕に何か運動をさせようと、昔バレエを習っていた母がこの世界の扉を開けてくれた。弟はタイツを履く事に抵抗したが、自分はなぜかすんなり馴染んですぐに楽しくなった。女の子は綺麗な衣裳を着たりというのが楽しみの一つかもしれないが、僕はただ跳んだり回ったり技を習得するのが楽しかった。今のバレエ少女・少年を見ていると、女の子はコツコツと美しさに磨きをかけ、男の子は何回回れるか、どれだけ難度の高い技術を身に付けられるかという事を競い合っている。ただ楽しいからやっているという事から将来バレエダンサーになりたいと心に決めるまで時間はかからなかった。コンクールに挑戦したりセミナーに参加したり海外のバレエスクールに留学する事で、同世代の才能に感化された。みんなバレエ漬けの毎日を大変な思いもしながら、でも楽しんで大きな夢に向かって走っていた。世界には素晴らしいダンサーが沢山いて、中でもミハイル・バリシニコフという人は別格だった。彼の実際の舞台

は残念ながら観る事は出来なかったが、映像だけでも十分にその凄さが伝わってくる。テクニックだけでなく音楽性や佇まいすべてを参考にした。彼はスーパースターだが、自分も少しでも近づけたらと今も思っている。

どの世界でも憧れの存在が夢への原動力になったりするのだと思う。あの頃、バレエという素晴らしい芸術に打ち込めて本当に良かった。バレエがなかったら、僕はあの貴重な青春時代をただダラダラと過ごしていたかもしれない。そう思うと、僕とバレエを出会わせてくれた両親に感謝しなくてはいけない。年明けに平成27年度の名古屋市芸術奨励賞を受賞し、少し恩返しが出来た気がする。家族だけではなく沢山のの方々、色々な事に感謝するきっかけになった。松岡伶子バレエ団に入っていないければ、あの先生に出会っていないければ、あの作品を踊っていないければ・・・と思う事が沢山有る。僕自身に出来るのは、昔も今もただ目の前にある舞台を丁寧に真剣に取り組んでいく事だけ。

そしてもっと沢山の方にバレエを観に来ていただきたい。そして、今の子供達が本当に好きな事、打ち込めるものを見つけて、それぞれの才能が開く事を願っています。

名古屋と江戸川乱歩

2014年に生誕120年、翌2015年には没後50年を迎えた江戸川乱歩。新聞、雑誌で取り上げられたり、作品が映画化されたり、舞台公演があったり、新しい文庫が出たりと話題が尽きません。しかし、その江戸川乱歩が15年間も名古屋に住んでいたことは、意外に広まっていないようです。

明治30年代の名古屋に江戸川乱歩が残した足跡をたどりました。

(まとめ：山本直子)

貼雑年譜

江戸川乱歩はとくにまとまった自伝を残しているわけではありません。名古屋との関係を知るためにまず手にしたのは、『江戸川乱歩推理文庫特別補巻貼雑(はりませ)年譜』です。1941(昭和16)年4月初旬にまとめられたものを講談社が復刻しています。序には「時局のため文筆生活が殆ど不可能となったので暫く休養することにした。その徒然にふとこの貼雑帖を拵へて置くことを思ひ立った」とあります。

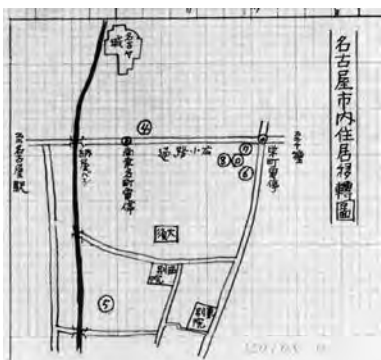
貼雑という名の通り、はがき、新聞記事、広告、名刺などが貼り付けられています。乱歩自身が書いた地図、部屋の間取り、楽譜、絵もあり、眺めているだけで何となく江戸川乱歩という人物が浮かび上がってくるような気がします。

そして、このなかに「名古屋市内住居移転図」があり、1897(明治30)年に転居してきた名古屋での住居がどこにあったのかわかります。転居してすぐは園井町、葛町へ移り、その後はいまの栄交差点の南西辺りで三度移転しています。園井町での住居は乱歩が書いた詳しい間取りもあります。

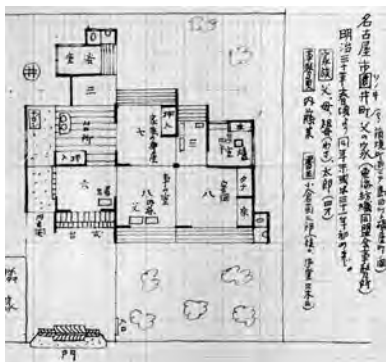
乱歩が生まれたのは1894(明治27)年、出生地が名張であることはよく知られています。が、ここにいたのは1年足らず、すぐに亀山に引っ越し、3歳になる年に名古屋にやってきます。引っ越しはすべて父の仕事の都合でした。

乱歩の父

江戸川乱歩が、エドガー・アラン・ポーからとったペンネー



名古屋市内住居移転図(『貼雑年譜』より)



園井町住居の間取り(『貼雑年譜』より)



1910(明治43)年の
広小路通



明治時代の
御園座

ムであることは、本人が随筆で明かしています。本名は平井太郎。父は平井繁男です。この父が東海紡績同盟会書記長となり、名古屋に転居してきたのです。平井一家が名古屋に引っ越してきた1897(明治30)年、5月17日には御園座が開場しています。当時の名古屋には芝居小屋はいくつもありましたが、御園座は東西の劇場と肩を並べる近代的な建物で、柿落しから多くの観客を集めました。翌1898(明治31)年には、名古屋にも電話が開通し、笹島から愛知県庁前(今の新栄)まで路面電車も通りました。

近代化が少しずつ進むなかで、父繁男は「名古屋の渋沢栄一」といわれる奥田正香(まさか)と出会い、名古屋商業会議所に勤務することとなります。奥田正香は元尾張藩士ですが、味噌溜製造業を創業して軌道にのせただけでなく、名古屋株式取引所、明治銀行、日本車輛、名古屋瓦斯、名古屋電力など公共のための事業を次々と興しました。そして、1893(明治26)年から1913(大正2)年の長きにわたり名古屋商業会議所の会頭を務めていたのです。

父繁男は、奥田正香に認められ、奥田正香商店の支配人になります。1904(明治37)年には日露戦争が起こり、翌年からは名古屋も戦争特需に沸きました。父繁男も奥田正香商店を辞し平井商店を創業し、機械の輸入販売と据付、石炭販売などで事業を拡大していきました。

乱歩の少年時代

名古屋での少年時代については、のちに記された随筆からさぐってみました。

小学校に入る前から中学校を出るまで親友だったTとの遊びがユニークです。誘い方も名古屋らしく、「タロさまは、えも？」(タロさまはいりゃあすかえも?を略したもの)。タロは乱歩の本名太郎。明治30年代の名古屋では、「なになにちゃん、あそぼ」という代わりに「なになにさまは、えも?」と言っていたのです。

Tとの遊びで長く続いたのは「国家ごっこ」。当時はやっていた高さ10センチくらいの将校や兵隊の瀬戸物人形を買い集めて、それぞれ一つの国を作ります。瀬戸物人形をトコトコ歩かせて外交交渉をしたり、ときには戦争が起きたりしてピンポン玉が敵陣に投げ込まれます。乱歩が生まれた年には日清戦争が勃発し、10歳になる年に日露戦争が始まっています。「子供の遊びにも、そういう世相が反映していたのである」(「国家ごっこ」1959年)。

初めて一人旅をしたのは小学校3年生の夏。三重県津市の親戚の家まで一人で汽車に乗って行き、従兄に蛙泳ぎを教わったりしました。「一人旅の放浪味が楽しかった。駅弁もおいしかった」(「故郷に夏ありき」1951年)。

五中時代の乱歩

「私は満二歳の時から満十七歳、中学を出るまで名古屋に住んでいたの、本籍は三重県津市なのだが、愛知県人としても通用するようである。名古屋市では園井町、葛町などにも、ちょっといたが、南伊勢町の元の株式取引所の前に最も永く住んだ。学校は南伊勢町に近い『白川尋常小学校』、そこからさほど遠からぬ

『市立第三高等小学校』、御器所の『県立第五中学校』(後に熱田中学と改称
*筆者注：現在の瑞陵高校)で五中は創立第一回の入学生であった」(「準名古屋人」1951年)と記し、五中時代には、悪友二人と満州に渡って牧畜をやろうと寄宿舎から逃亡して停学になったこともあると明かしています。



創立したばかりの五中
左が本館、右が体育館(瑞陵会提供)

『貼雑年譜』には、「熱田中学創立三十周年記念祝賀会紀要」(昭和13年発行)が貼り付けてあります。そこに、旧友本荘実が「旧校舍時代備忘録」として、雑誌「中央少年」について書いています。乱歩の発案で、探偵小説を書いて雑誌をつくり、それを小学校の下校時間にあわせて校門に立って、小学生に販売したといひます。乱歩は自分で広告を書いて、電柱や小学校の壁にペタペタ貼りました。当時は、今のよう

に街に広告を貼るようなことはしていなかったの、ハラハラしたとのこと。「街頭におけるこの勇敢なる行為を驚異の眼で眺めたことを憶えている」とあります。幸い、学校から処分されることはありませんでした。

乱歩が五中を卒業した1912(明治45)年、父繁男が事業に失敗し、家族で朝鮮に移住することになり名古屋をはなれます。その後、乱歩は単身帰国し早稲田大学予科に編入しています。

小酒井不木と乱歩

小酒井不木(ふぼく)は蟹江町出身の医学者であり随筆家であり翻訳家であり探偵小説家です。1890(明治23)年生まれなので乱歩の四歳年上。医学者としてアメリカ、ヨーロッパへ留学し、エドガー・アラン・ポーやコナン・ドイルの作品に出会います。留学中に持病の結核が悪化し、帰国後は静養しながら新聞に随筆を連載していました。欧米の探偵小説を紹介することによって、当時の「新青年」の編集長であった森下雨村(うそん)と交流が始まります。

乱歩が「新青年」に応募した「二銭銅貨」について、雨村が不木に意見を求め、不木が絶賛し推薦文を書いたことはよく知られています。

不木は1923(大正12)年に名古屋の御器所町に新居を構え、以来、新進の探偵小説家たちとの交流も盛んになります。乱歩は次のように書いています。

「私は鶴舞公園裏の小酒井さんのお宅を、初めは大坂から、後には東京から、よく訪問したものである。

また、昭和二年には、小酒井さんを中心に、国枝史郎、長谷川伸、土師清二、平山蘆江の諸氏と私とで、耽綺社という大衆文芸合作の会を作り、毎月一回名古屋に集まって、合作の筋立てをしたものである。その会合には『寸楽園』という料亭がよく使われたのを覚えている」(「名古屋と探偵小説」1958年)

しかし、1929(昭和4)年、不木は風邪から肺炎を併発し、39歳の若さで亡くなります。乱歩らは「小酒井不木全集」(改造社)を編み、後世に残しました。乱歩は不木の33回忌に墓の隣に「不木碑」を建てています。この乱歩が建てた不木碑は現在、蟹江町歴史民俗資料館に移設されています。



江戸川乱歩
(立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター提供)

参考文献

『江戸川乱歩推理文庫 特別補巻 貼雑年譜』

江戸川乱歩 講談社

『江戸川乱歩推理文庫 60 うつし世は夢』

江戸川乱歩 講談社

『乱歩と名古屋 地方都市モダニズムと探偵小説原風景』

小松史生子 風媒社

この人と...



日本舞踊 赤堀流三代家元

あかほり かづえ

赤堀 加鶴繪さん

伝統と創造の間を しなやかに舞う

日本舞踊「中京五流」のひとつとして、芸どころ名古屋に存在感を示す赤堀流。その三代目である赤堀加鶴繪さん(以下「加鶴繪さん」)は、伝統的な日舞の継承者であるとともに、幻想的な創作舞踊で知られている。そうした芸風はどのような環境で培われ、そこにはどのような思いが込められているのか。加鶴繪さんの「これまで」と「これから」についてお話をうかがった。

(聞き手：米田 真理)

(加鶴繪さんの親族以外は、敬称を略した)

名人の孫に生まれて

加鶴繪さんの祖母は、戦後、名人と謳われた赤堀流二代目・赤堀鶴吉さん(明治29 [1896]—昭和49 [1974])である。鶴吉さんの息子、つまり加鶴繪さんの父は、日舞は女の子が継ぐべきものという前提のもと、戦時中という事情もあって、日舞の道へは進まなかった。その分、加鶴繪さんへの期待はいかばかり大きかったかと思われるが…。

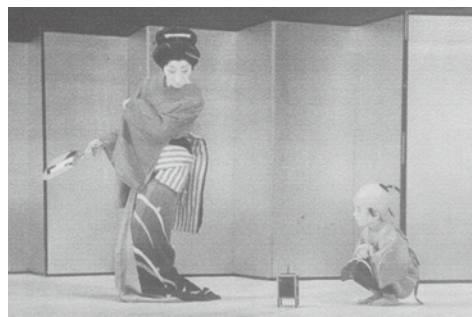


常磐津「新子守」初舞台 満4才

「実は、祖母から直接、家元を継ぐように言われたことはないんですよ」と、加鶴繪さんは語る。「小さい頃、自分で振りを付けて踊ったのを見て、この子が継いでくれると思った」と、来客に話す祖母の顔が忘れられないそうだ。加鶴繪さんが日舞を始めたのは4歳のとき。そのころは素直に習い覚えても、やがて小学校に入学すれば子どもたちとの交流も増え、他の楽しみを知っていこう。そのことがわかっているから、祖母は決して日舞の道を押しつけるこ

とはなかったのだという。

ただし、祖母は、生活態度にはたいへん厳しかった。当時は、一般の家の娘たちが行儀見習いのために日舞を習うことが多く、その模範となるようにしつけられていた。加鶴繪さんは、家元である祖母と、たくさんのお弟子さんたちに囲まれ、ごく自然に日舞の道を歩み出したのだ。



昭和31年(6才)
歌沢「松葉浴衣」
CK開局31周年記念
第12回邦楽の集い

祖母と初共演

芸術一家に育つ

創作舞踊の振り付けはもちろん、構成や演出、ナレーションまでこなしてしまう加鶴繪さん。さもありませんと思わせるのが、芸術家揃いの家族の存在だ。

祖父は、大正琴を発明した森田吾郎さん(明治7 [1874]—昭和27 [1952])である。大正琴といえば、手



祖父 森田吾郎(本名 川口仁三郎)

軽に演奏できる楽器として現在でも愛好者が多い。明笛(みんてき)という笛の演奏家として活躍していた森田吾郎さんは、欧米に渡って演奏活動を行うこともあり、手軽に西洋音楽を奏でられる楽器を作ろうと、38歳のとき、

金属弦と鍵盤を有する大正琴を発明したのである。

祖父の発明は、鶴助として西川流日舞の世界で活躍していた祖母の芸風にも変化を及ぼした。結婚後、祖母は森田鶴という名で、夫の考案した楽器であるムーンライトや金剛琴の普及のため、童謡舞踊の創作に力を注ぐようになる。大正末期から明治初期にかけて、夫婦の二人三脚の活動が続いていた。

そして、ここに誕生したのが、加鶴繪さんの父で画家の河合五郎太さん(1918—1995)である。五郎太さんが師事した画家・和田三造は映画の仕事に携わり、大映映画『地獄門』(昭和

28年)で第27回アカデミー賞衣裳デザイン賞を受賞している。五郎太さんも映画のデザイン画を分担していた。そして、五郎太さんは、東京、京都、全国各地の料亭や

ホテルのデザイン、障壁画の制作で名古屋の自宅にはほとんどいない生活だった。そんな父は、加鶴繪さんにとって、“すれ違い”が多かった上に、口ごたえのできない怖い存在だったという。

後年の五郎太さんは、加鶴繪さんの創作舞踊の衣裳や装置をデザインしている。こう聞くと、父娘の微笑ましい共演、あるいは、いわゆる“ステージパパ”の様子が想像されるが、実際は五郎太さんは娘を独立した芸術家と認め、踊りには決して口を出さないし、舞台の出来上りを評することもなかった。「父が踊りをしていたら、もっとうるさく言ったでしょうけどね」と、加鶴繪さんは笑う。

赤堀流舞踊会のパンフレット表紙には、初回以来、五郎太さんによる鶴の画が描かれている。そこには「五郎太」のサインとともに、他の作品には見られない「翔鶴」の落款(朱の印)が。また、赤堀流の稽古場の建具にも、五郎太さんのデザインによる鶴のモチーフが見られる。昔ながらの気難しい父親だったという五郎太さんだが、心はいつ

NHK「芸能花舞台」リハーサル中
祖父の発明した楽器 大正琴・ムーンライト・金剛琴の
説明をする父 河合五郎太(左) 山川静夫(右)

も、「鶴」の字を背負って奮闘する加鶴繪さんに寄り添っているかのようだ。

芸術家の集まりである加鶴繪さんの家族たちは、それぞれの作品ができあがる寸前には、それぞれがイライラしていた。加鶴繪さんいわく、「みんな、人はいいのだけど、気が短いんです」。そうした家族のイライラをひたすら受け止めていたのが、加鶴繪さんの母・久美子さんだった。加鶴繪さんのよき理解者であり、創作の衣裳制作過程でいつも適確なアドバイスをくれたという。家族の活動を支える、かけがえのない存在だった。

加鶴繪さんの創作舞踊が花開いた背景には、こうした芸術一家の血脈と家風があったのだ。

伝統を受け継ぐ使命感

舞踊家としての加鶴繪さんのルーツを探るうえで、血脈と同様に重要なのが、芸脈としての赤堀流である。

加鶴繪さんの祖母であり師匠である二代目鶴吉さんは、少女時代、大阪の西川嘉義(文久4 [1864]—大正10 [1921])の内弟子となり、その後、嘉義の勧めにより名古屋の西川鶴吉(文久3 [1863]—昭和16 [1941])に師事するようになった。その西川鶴吉が興したのが、赤堀流であった。

初代鶴吉は、初代西川鯉三郎(文政7 [1825]—明治32 [1899])に師事し、16歳で西川の名を許されたほどの名手であった。鯉三郎の没後、後継者が決まらなかったため、経過措置として合議制が敷かれた際には、師範の総代である補佐職5名の中に選ばれ、名実ともに実力者であった。そして鶴吉が昭和16年に77歳で他界するとき、本姓である「赤堀」を流名とし、流派を興すよう高弟に遺言。その高弟こそが、加鶴繪さんの祖母だったのだ。

その時の師弟の気持ちについて、加鶴繪さんは、「名古屋で育てられてきた踊りを守りたい、という思いだったでしょうね」と分析する。その4年前に西川流を継いだ二代目鯉三郎が東京の歌舞伎俳優出身だったことから、長年、名古屋の西川流の第一線で活躍してきた初代鶴吉の中に、使命感が生まれたのだろう、ということだ。

こうして、先述のように森田鶴として活動していた祖母は、初代鶴吉が他界すると同時に赤堀鶴と名乗り、二代家元として日

荻江「鐘の岬」於 御園座
三代家元として初主宰公演

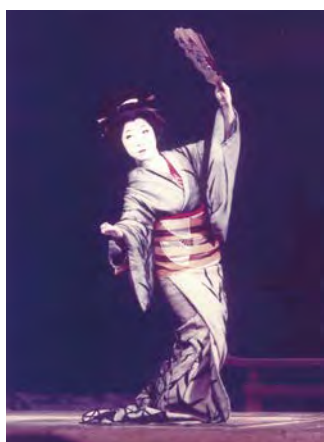
舞に専心するようになった。10年余りは師の遺訓に従い、ひたすら弟子の指導のみにあたっていたが、昭和27年に二代目赤堀鶴吉を襲名したのを機に舞台上がるようになり、以後、同49年に他界するまで精力的な活動を続けた。

加鶴繪さんは4歳で二代目鶴吉に入門、初舞台を踏んで以来、その芸風を身近に感じながら成長していく。祖母の稽古は細部に厳しく、扇の扱いや、長絹(ちょうけん：能装束の一種)を着たときの動きなどを、繰り返ししつけられた。また、もっぱら立役(男性の役)の稽古が多かったのだが、これは基本を習得するためだったという。

「名古屋で育てられてきた踊りを守りたい」という初代と二代、二人の鶴吉の精神は、そのまま加鶴繪さんに受け継がれ、芸術活動の揺るぎない屋台骨となっている。



長唄「おらんだ坂」
昭和53年 第1回新作発表会



清元「かりがね」
昭和55年 於御園座
名古屋演劇ペンクラブ賞受賞

若き家元の活躍

祖母が他界したとき、加鶴繪さんは24歳の若さだった。だが、家元を継承することに迷いはなかったという。理由の一つは、学生時代を過ごした金城学院の雰囲気も手伝って、日舞以外の世界に目移りする機会がなかったこと。だが、何よりいちばん大きな理由は、日舞そのものが大好きだったことだ。厳しい稽古の末に舞台上に立てる喜びが、自然に決断させたのである。

若き家元がまず力を入れたのは、これまでどおりに流儀をまとめ上げることであった。昭和50年8月、二代目鶴吉一周忌追善の「赤堀会」を御園座で開催、加鶴繪さんは祖母の振付による長唄「しのぶ草」と荻江「鐘の岬」を手向けている。翌年8月には三回忌追善会によって一門の変わらぬ結束が示され、以後も、二代目の回忌や十年ごとの節目に会が催されている。

一方、同53年7月、リサイタル形式による「赤堀流家元新作発表会」が愛知文化講堂で催されたのを機に、加鶴繪さんの創作舞踊が世間の注目を浴びることになった。

こちらも同56年6月に第2回、さらに翌年6月の第3回からは「赤堀加鶴繪舞踊会」と会名を改め、回を重ねている。

このように、古典を中心とした一門の発表会「赤堀会」と、創作舞踊発表の「赤堀加鶴繪舞踊会」が、加鶴繪さんの活動の二本柱となっていく。この姿勢が評価され、昭和56年には名古屋演劇ペンクラブ賞を、さらに昭和58年に名古屋市芸術奨励賞、平成6年に都市文化奨励賞を受賞した。日本舞踊の伝統を重んじつつ、同時に創作に新境地を見出した二代目鶴吉の芸風は、確実に加鶴繪さんに引き継がれているのだ。

創作舞踊の世界

加鶴繪さんが創る舞踊は、まさに夢の世界だ。ベネチアのカーニバルを題材とした「アンソレイエ ensoleillé」、桃山時代のワインパーティーを描いた「紅酒(あかいさけ)」、星の精が地球で遊ぶ「北斗」、仙女が若返る「fée(フェ)」、自然破壊がテーマの「鳥」、世紀末の闇に光を登場させた「喜(よろこび)」など。本年6月12日に開催された第27回では、地唄「からくり的」をヒントに創作された「迦楽理(からくり)」が披露された。踊り手である加鶴繪さんは、「鳥実は女」という

役。鳥の姿にされ閉じ込められていた女が自由を得て、自分を追ってきた若者に戦いを挑む。ところが

その若者も実はからくり人形で、さらに「実は…」が続いていくというファンタジーである。

用いる音楽にも、加鶴繪さんの感性があふれている。モーツァルトにビートルズ、喜多郎、きゃりーぱみゅぱみゅまで、加鶴繪さんの世界を表現するのに適った曲が、ジャンルを問わず自在に織り込まれる。

時には、批評に晒されることもある。第3回で発表された「幽影」は、『平家物語』に取材した能「清経」を下敷きとした作品。芸術を愛した若き公達・平清経は、無意味な戦闘を悲観し、柳ヶ浦で入水自殺する。こ



創作「紅酒(あかいさけ)」



創作「迦楽理(からくり)」
平成28年6月12日
第27回赤堀加鶴繪舞踊会

のときの清経の心の動きを、加鶴繪さんはバルトーク作曲の「MUSIC FOR STRINGS, PERCUSSION AND CELESTE（弦楽器と打楽器とチェレスタのための音楽）」にのせて、一人舞いで踊りきった。その際、「妻が登場しないと違和感がある」という声があったのだという。能の「清経」では、主人公・清経の幽霊が語り舞うのを受け止める人物として、清経の妻が登場する。能を見慣れた人にとって、妻のいない舞台は受け入れづらかったのだ。

だが、見る人の感じ方はそれぞれだし、見る人の内面に演じ手が立ち入ることはできない。あくまで自分の内面を表出するために、踊るのだ。その信念が、加鶴繪さんの創作活動を支えている。

日舞のこれからのために

自在な境地に見える創作活動だが、実は、その根底にあるのは日舞への熱い思いである。第1回「赤堀流家元新作発表会」のパンフレットに、加鶴繪さんは「皆様に楽しんで見ていただける美しい作品を創りたいというのが、私の第一の願いでございます」と記している。その思いは今日まで変わらず、日舞を見慣れていない観客、特に若い人の心に響くよう、音楽や衣裳にこだわり続けている。「見に来てくれた人が、『ああ、衣裳がきれいだなあ』だけで終わってもいいんです」と、加鶴繪さんは語る。何か一つでも観客の心に残れば、それが日舞の裾野を広げることになるのだから、と。

日舞の将来に向けての取り組みは、お弟子さんへの指導でも試みられている。赤堀流では昭和53年以来、毎年、新年初舞の会をホテルで行い、新振付の初唄を名取一同で踊ってきた。これを、平成12年からは「赤堀加鶴繪舞踊会」の舞台で踊ることにしたの



清元「傀儡師」平成2年NHK芸能花舞台
昭和58年振付

だ。芸は舞台に立つことで上達するものだが、日舞の舞台には、衣裳やかつら、道具など、何かとお金がかかる。そこで、かつら、化粧を用いず、赤堀流揃いの紋付き姿で踊れる演目を作ったのだという。お弟子さんに一回でも多くの舞台に立ってほしいという思いと、いちど舞台に立つ喜びを味わったら、それを忘れないはずだと確信のこもった試みなのだ。

ひとつの作品を作り上げる際には、妥協できずに悩み続けるという加鶴繪さん。一つの舞台が終わると、その残務整理の間にもう次の舞台のことを考え始めるという。なかなかまとまらずにイライラすると、二代目鶴吉さんが教えてくれたことを思い出す。「『越後獅子』という名曲は、あつという間にできあがったらしい、そんなこともあるのだよ。」と。

次回が第28回となる「赤堀加鶴繪舞踊会」は、来年7月1日に開催される。どのような夢の世界が広がるのか、今から待ち遠しい。



平成3年 常磐津「猩々」NHK芸能花舞台(初代家元より伝承、大切な演目)
猩々 家元 加鶴繪(右) 酒売り 補佐職 鶴登(左)

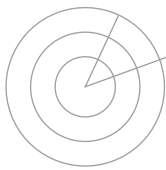
これからも、羽ばたいて

若くして家元の重職に就いて以来、40年余りの長きにわたり流儀を守り続けた加鶴繪さん。「やめようと思ったことはありません。いや、やめてはいけません。やめたいほどつらいことは、何度もあったけれども」。それでも、ここまで続けてこられたのは、「努力をしないと後味が悪い」と断言するほどの、根っからの努力家だからなのだろう。「火花のような一瞬の輝きのために、毎日がある」との言葉に、加鶴繪さんの姿勢が凝縮されている。

周囲は、そろそろ「鶴吉」の大名跡を、と考えているのではないだろうか。その問いへの答えではないが、加鶴繪さんは、名前について次のように語ってくれた。これは、昭和46年に名取になったとき、二代目鶴吉さんが付けてくれた大切な名。「“つるきち”は男みたいたし、明るい響きの“かづえ”って、いいでしょう?」。

明るく、そして、しなやかに。…それはそのまま、時代を越えても輝き続ける、伝統芸能の魅力に重なっている。お話をうかがう間、加鶴繪さんのキラキラした瞳の中に、時代を羽け渡っていく鶴の姿が見えるように感じられた。

ピックアップ



名演小劇場こだわりの新企画 人気集める毎月の「ゲキ×シネ TIME」

「ゲキ×シネ」なるジャンルをご存知だろうか? 「エンゲキとシネマのいい関係」を願ったネーミングのもと、関西出身の「劇団☆新感線」の生の舞台を映像化、全国各地の映画館で上演する試みで、2004年のスタート以降、多くの観客を動員、魅了してきた新しいエンターテイメントである。従来の劇場中継の常識を破り、何十台ものカメラを駆使し、ズームや編集を重ねて演出された迫力の映像は、舞台の緊張感と臨場感を映画館で体験できる全く新しい映像体験として市民権を得つつある。

また「劇団☆新感線」の作品と言えば、劇作家・中島かずきの描く壮大なストーリーに、いのうえひでのり演出の本格的で疾走感あるアクションや殺陣、笑いや涙、歌や踊りまでが散りばめられた、派手な舞台が売り物で、天海祐希や小栗旬、早乙女太一、松山ケンイチ、堺雅人、市川染五郎ら銀幕やTVで活躍中の有名俳優から「ぜひ出演したい」と出演依頼が絶えない事でも有名だ。

そんな「ゲキ×シネ」が今年の4月から「ゲキ×シネ TIME」として、今までの話題作から14作品を厳選し、月1本の配給を始めている。東海地区ではミッドランドスクエア シネマと名演小劇場で上演されているが、特に名演小劇場では全国的にも珍しく、1週間連続での上演に挑戦している。「ぜひやらせて欲しいとオファーしました。かつては芝居の拠点だった当館だからこそ、意地とこだわりもありましたね」と話すのは、同館の支配人で映写主任でもある阿部勇司さん。かつて名古屋の民間劇場のメッカとして、東西の有名劇団が軒並み公演をしていた名演小劇場が、独特の趣を持つ映画館として改装リニューアルオープンしたのは2003年2月。筆者もココで劇団公演した時の思い出は今でも脳裏にくっきり残っている。「お陰様で客足の伸びも順調でリピーターも徐々に増えてきています。1週間の期間中、朝一番の1日1回上演なのですが、土日はほぼ満員ですね」と阿部さん。今まで演劇に馴染みが無かった映画ファンに舞台の楽しみ

を気軽に伝え、名演小劇場から遠のいていた演劇ファンの足を、再び運ばせることになれば素敵だと思う。「ゲキ×シネ」は演劇、映画というカテゴリーを越えた豊かさへの挑戦でもあるのだ。劇場へのノスタルジーはともかく、読者の方々もこれを機会に、パワーあふれる映像体験をされてはいかがだろうか?(H)

●名演小劇場「ゲキ×シネ」年内の上演予定

9月3～9日「朧の森に棲む鬼」

市川染五郎、秋山菜津子、真木よう子ほか出演

10月1～7日「蜉蝣峠」

古田新太、堤真一、高岡早紀ほか出演

11月12～18日「SHIROH」

中川晃教、上川隆也、江守徹ほか出演

12月17～23日「髑髏城の七人」

小栗旬、森山未來、早乙女太一ほか出演



近年はおしゃれな映画館として映画ファンから親しまれている名演小劇場



「ゲキ×シネ TIME」のチラシ

いとしの サブカル

ライブアイドルの今

LIVE HOUSE GSP STUDIO

株式会社グローバルサウンドプロデュース 代表取締役

株式会社D-FACTORY entertainment 代表取締役

たかし ちかし

高橋 爾

名古屋のアイドルライブの礎を築いたパイオニア。ライブアイドルの聖地、「LIVE HOUSE GSP STUDIO」を中心に、ELL・ハートランド・BOTTOM LINE・ダイヤモンドホール・ZeppNagoya 等で数々のアイドルライブを手がける。

空前のアイドルブーム。

今から11年前…。「コスプレをした女の子が歌うライブをやってみませんか？」

私の知人から言われたその一言がきっかけだった。当時は、



ZeppNagoya で歌う 城 奈菜美

ライブハウスの関係者の誰も想像すらしていなかったであろう。私も半信半疑だった。『お客さん来ないでしょ』と、内心。

その後、東京でのコスプレライブのニュースを見た。猫のような耳を頭につけて、ライブをしている様子は、あまりに衝撃的で斬新だった。ライブでのトークも、もはや日本語なのかでさえ分からない言葉に、何故かお客さんも拍手喝采だ。

私は、知人に会いに行った。「やってみよう」

が、実際に動いてみると、出演者が全くいない。仕方なくネットで一般応募の出演者を募った。やっと一人応募があった。その娘は、アニメキャラのコスプレをした、高校を卒業して間もないくらいの女の子。人見知りなのが全くしゃべらず、おとなしい感じの娘だった。それが後の城 奈菜美である。

最初の発案から1年以上かかったが出演者も揃い、2006年4月、GSP STUDIOにて、コスプレライブ「SuperCosplisson」がスタートした。今のアイドルライブの原型ともなったライブの幕開けである。

正直、ステージの出演者よりも、お客さんの反応が気になった。ライブ終了後のお客さん同士の会話は、「楽しかった」と口を揃える。今後の開催の目処がついた。

が、やはり出演者がいない…。2016年の今では、名古屋でも推定200組以上アイドルがいるが、当時は皆無で出演者探しに苦労した。私と前述の知人とで、コスプレ会場にスカウトに行きたくらいだ。

そんな知人から提案。「コスプレアイドルを集めたCDを作りませんか？」

その知人は、元々大手レーベルで仕事経験もあり、現在も

K-DISCを経営しているCD制作のプロである。この目論見は大いに当たった。このCDを全国にリリース後は、東京、大阪からも出演者が訪れ、出演枠は半年先までいっぱいになった。このライブは、メディアにも取り上げられ、各局がこぞって押し寄せた。毎回ライブごとにテレビカメラ、取材が入り、いつしか「地下アイドルの聖地」と揶揄された。(地下アイドル→現在の呼称はライブアイドル)

この頃から他のライブハウスもアイドルブームに乗り始めた。アイドルなんかやらない、と言っていたライブハウスまでもアイドルを扱い始めた。バンドブームに陰りがみえている頃であったので、これも自然な流れであろう。それどころか、ライブ



イオンで歌う 彼方彩夏

ハウスの関係者ではない、音楽業界とも無縁の中小企業や、地方自治体、果ては一般のお客さんまでもがアイドル運営側となり、アイドルを育成するようになった。余計なお世話かもしれないが、リズムの裏打ち・音程ピッチ・ドラムのスネア・金物系・ベース・ギターの音等本当に理解して、アイドルを育成しているのだろうか？

昨今アイドルを扱うライブハウス、出演するアイドル、アイドルをマネージメントする運営も増え、それでも名古屋のお客さんの分母は10年前と変わらない。そればかりか、10年前の開催当時は、お客さんもライブイベント全体を楽しむ方が多かったが、今は固定のアイドル(グループアイドルでも1人のみ)しか応援しないお客さんが増えてきた。

その先、どうなるか…簡単なことである。当然、お客さんの取り合いである。

アイドルがライブで歌う曲も『どの曲がお客さんに沸いて(盛り上がり)もらえるか』、『あのお客さんが好きな曲はこれだから』…アイドルも表現者である以上、アーティストであるが、そもそもアーティストに必要な独特の世界観や表現もなく、お客さん主体のライブが増えてしまった。

アイドルの皆さん、あなた方は今どこに向っているのですか？

10年前の斬新さを取り戻して欲しいと、切に思うこの頃である。

名古屋市文化振興事業団 主催事業 10月

チケットは、好評発売中です。 10月にお届けするバラエティーに富んだ公演を紹介します。

人形浄瑠璃「文楽」

日程 10/7(金)



写真：青木信二

昼の部 14:00
夜の部 18:30

【昼の部・夜の部 2回公演】

会場 名古屋市芸術創造センター

料金	一般	友の会・障がい者割引
一階席	4,700円	4,200円
二階席	2,600円	2,300円

全指定席 ※未就学児の入場はご遠慮ください。

人形浄瑠璃「文楽」は、日本を代表する伝統芸能の一つで、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術。初めてでも楽しめる解説・字幕付きで上演します！

Pコード:451-539

名古屋市長文化振興事業団友の会 新規入会キャンペーン事業 古謝美佐子コンサート 沖縄の今昔を歌う

日程 10/16(日)
16:00
会場 中川文化小劇場



料金	新規入会	友の会会員	一般
全指定席	3,500円	2,800円	3,800円

キャンペーン特典として1年分の友の会会員権をプレゼント！
この機会にご入会いただくと2,300円もお得です！

年会費3,000円 + 年会費 新規価格
会員価格2,800円 ▶ 年会費 0円 + 3,500円

沖縄音楽を代表する歌手の一人、古謝美佐子が名古屋にやってきます。しっとりとした情感あふれる歌声をお楽しみください！

Pコード:299-803

名古屋の演劇人が贈る名作劇場 『ルームサービス』

日程 10/21(金) 18:30
10/22(土) 13:30 18:30
10/23(日) 13:30
【4回公演】



会場 西文化小劇場

料金 3,000円 (日時指定・自由席)

友の会・学生・障がい者割引2,400円
※未就学児の入場はご遠慮ください。

世界中で愛され続けるアメリカン・コメディの傑作「ルームサービス」。地元のキャスト・スタッフが劇団の枠を超えて集結し上演します！
作/アレン・ボレッツ、ジョン・マレー 翻訳/酒井洋子
演出/はせひろいち

Pコード:452-956

チケット取扱い

- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL:052-249-9387 (平日9:00~17:00/郵送可)
そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
- チケットぴあ TEL:0570-02-9999 ※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。

主催 公益財団法人 名古屋市文化振興事業団

公演に関するお問い合わせは事業団チケットガイドまで

頼もしい味方をお探しですか？



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント

株式会社 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・パレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市中区千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ① 舞台の企画・制作マネージメント
- ② イベントの企画制作
- ③ 芸術団体のコンサルティング
- ④ 舞台・イベントの運営

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響・映像設備

設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909